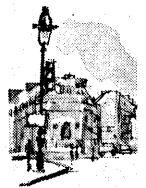


幼児教育を考える(二)

— 氾濫する教育論を批判して —



清水 美智子

六 自分自身の哲学をもたない教育論

— 教育に哲学は不可欠である —

こうして、批判すべき第四点につながってくるのである。すなわち氾濫する教育論にみられる哲学の欠如を、私は鋭く指摘しなければならぬ。それは、誰か古今東西の著名な哲学者の説を読んで借りてくるとか、誰かに考えてもらおうといった式のものではなく、本来、哲学とはひとりひとりのものであり、ひとりのふつうの人間として、自分は何のために生きるのか、自分にとって生きるよるこびはどこにあるのか、人間の幸せとは何か、自分が生きていく上に最も大切だと考えるものは何か、自分は日々をいかに送っているか、どのよ

うな人間として生きつづけたのか、自分の日々の営みは、そのような人間としての願いを実現していく方向になされているのか：等をつねに考えることそれ自体が哲学なのである。

こういう自己省察をもたず、自らがふつうの人間であることを忘れてしまったような、科学者・専門家・政治家・財界人によって導かれてきた近代科学技術の進歩、経済の高度成長政策がもたらしたものは、哲学を見失った社会¹¹人間が何のために生きるのかわからなくなってしまった社会であり、表面の繁栄とはうらはらに、各界とも内部矛盾は複雑していくばかりなのだ。しかも私たち庶民や、最も素朴であった農民までもが、見かけの繁栄におぼれ、営みつがれてきた素朴な人間の心や生活の知恵を忘れて、自分の目で事実を見つめ自分の

心で感じ自分の頭で考えることを忘れて、何かに駆り立てられて動くような生活におちこんでしまっている。哲学を見失った現代日本の社会を憂えて、「哲学よどこへ行つた」、「哲学の復権を」と心ある人たちが口にするようになってきたが、それは何もむずかしい専門的なことをするのではないのだ。ひとりひとりが、自分の内面の奥にひそむ素朴な人間の生の心を取り戻し、自分で考えていくことなのだ。権威あるものにするがろうとしたり、見かけのよさをとりつくろったり、人によく見せようと構えたりしないで、自己の内面にいつも問うかけ、内面の願いに忠実に、自分の一回きりの生を大切に生きる方を模索しつつけて、日々生きていくことこそ、哲学することなのだ。ひとりひとりが、そういう考えで生きていく努力をすることによってのみ、この危機に瀕した状況を打開していく新しい価値観、哲学が生まれ、社会が蘇生していく。

とくに、「教育」は、「人間が生きて発達していく」という生命活動の根源にふれ合う活動であり、自らは何のためにかに生きるのか、どう生きることが幸せなのかという哲学的考察を抜きにしたところには、実践も理念もなりたない。哲学をもたざる教育は、教育ではなく飼育でしかない。私たち

が、社会の未来を託していくべき青年が、今日では、生きがいを見失って、無気力に墮していか、それにたえかねて生きがいを求めて、優秀な能力ある青年が過激行動に走っていかするような現実を、わがこととしてうけとめ、その根本にある意味を考えてみるのが、教育を論じたり、教育活動にあたる者のすべてに必要なのではないか。

高度成長はわれわれをどこに導いてきたか、哲学を見失った近代科学技術はわれわれに何をもたらしたか、という今日の社会の反省は、幼児教育界における、成長促進・能力開発・みかけの早熟化に対応する早教育あるいは科学的な新しい保育が、子どもたちをどんな人間に導いていくのか、子どもたちにどんな人生をもたらすのか、という疑問や反省につながってこなければならぬ。計画的な生産性の向上によって、目に見える物質の豊かさが得られた反面、目に見えぬ心の内面の貧しさがもたらされ、感じない、考えない、機械か動物のような人間になっていく危険のある今日、すぐ目に見えて客観的に評価できる効果だけを狙って教える計画的組織的保育をすすめている保育者は、その子どもたちに、どんな人間として生きていってほしいと願っているのだろうか、その保育者自身の哲学を問い直してほしい。そして、広い意味で、

「教育の効果とは何か」、幼児期の教育の効果は、どの時点で、誰が、どう評価すべきもの、あるいは評価しうるものなのか、をも考えつづけてほしい。それはこれまでに「さまざまの教育」をうけてきたあなた自身の人間評価につながるものではなく、なからうか。

七、教えることに熱中しすぎる「教育」を反省し、「共育」を考えよう。

一体に、私たち近ごろのおとなは、親も教師も、「教育」の教の字にだけ熱中しすぎてはいないだろうか？ いっ、どこで、何を、どう教えるか、といったことにこだわりすぎてそういうことだけにこり固まるとはいないだろうか。育つことの意味を忘れてしまっていないだろうか？ 「教育過熱」の中の私の疑問である。公教育、施設教育の普及する以前から、人間は子どもを育ててきた。私自身も幼稚園教育をうけてこなかった。子どもは、人間は、ひとりでは育たない。おとなになっても同じことがいえよう。人生の先輩である親や先生（先に生まれた人）が、自分たちの生命をうけついでいる若い世代をいっくしみ、自分たちをのりこえてよりよく生きていってほしいという願いをこめて、日々生活を共にする中

で、共に生きて育っていく地味な過程の中に、人間らしいゆたかな心と生活の知恵と知識を伝えていくところに、教育の本質があるのではないだろうか。教えるということも、本来は、もっと人間の自然の心の動きに即した柔かい営みなのではないだろうか。これは、息子と娘を育てている、母親としての私の実感なのである。教育ではなく、「共育」ということばのイメージの方に、本来の教育の姿があるのではないだろうか。

八、幼児教育を、小学校への準備教育とみる教育論を批判する。

私は、既にその一部を利用したように、昨年度保育学会が公募した「これからの保育内容」にに応じて、私自身の考えを発表した。本論文では、そこに書き足りなかったことや別の方向からのアプローチを意図して書き進めてきたので、自ら深く考えようという心あるみなさんは、是非とも、保育学年報所載の私の論文を併読していただきたい。その論文の冒頭で私は、今日、幼児教育の振興がなぜ必要か、という根本への問いかけを試みた。それを少しここで補って、もう一つの批判すべき点をはっきりさせておきたい。

幼小教育の関連とかいうこともいわれて、小学校での適応をスムーズにすすめるための準備教育としての幼児教育の必要性を説く人たちがあつた。たとえば、昨年度の教育心理学会総会（於神戸大学）のシンポジウムにおける国語研究所の天野清氏の発言にも、はっきりその考えが出ていたし、ドイツからとり入れた「学齡成熟」という考え方を進めている教育心理学者の見解もこの線をいくものであつた。こういう幼児教育観は、一見、理があるようだが、よく考えてみると実におかしい。

一に、現在の初等教育は、あるべきのぞましい姿からはほど遠く、学校外の塾の学習などに多くを依存しなければ大多数の子が消化できないような、表面的な知識のつめこみ教育に墮してしまつていて、いまや抜本的改革の必要があることは、文相も日教組もみとめ、広く指摘されていることである。

二に、子どもの発達の実態を無視して——かつてに、現代の子どもは発達が進んでいるという幻想をつくりあげて——まるで一律に課せられた過重なノルマを果たさねばならない式の発想ですすめられていく。このような少年期の教育は、子どもたちから「学ぶよろこび」を奪つてしまつてゐる。親や教師はやむを得ず、「成績の序列」や「入試」をエサにして、

おだておどして学習させるが、中学、高校、大学と進むにつれて、何のために勉強するのかわからない、ひいては、何のために生きてゐるのかわからない事態をうんでいく。

三に、こういう現代の教育界で育ちゆく青少年の生體に目をとめて、その根本を考えようとせず、無茶な小学校の教科内容に合わせるための準備教育として、到達点をきめて、保育内容を組織化していこうとするのは、幼児の生活にも個性を無視した一定のノルマを課すことであり、いくら、遊びの中で、とか、遊ばせながら、とかとなえたとしても、遊びの本質とはほど遠く、幼児から「遊ぶよろこび」を奪つてしまふことにほかならない。遊ぶよろこびも学ぶよろこびも充分にものにせず育つていった子どもたちが、成人して、働くよろこびをもものにし得るはずはなく、社会にとつても有為な人材となり得ないことは明白であらう。ここでもまた、人間は何のために生きるのか、人間の幸せとは何か、という哲学的考察の欠如を批判できよう。

四に、一律に到達点がきめられてゐる準備教育的な幼児教育論は、学齡期以後の教育の中で、特別の配慮を要するような何らかの障害をもつ幼児を、はじめから除外した考えに立つてゐることを批判せねばなるまい。もし、障害児のことは

また別だ、といいきってしまう学者があるならば、それは実に多種多様な障害の実態をしらない者であり、私は、障害児(者)と非障害児(者)とを判然と二分できるとするそのような人間観はいかなるものか、説明を求めたい。私が、もし明日にでも事故にあつて片腕を失つたとしたら、あるいは年老いて耳が遠くなつたとしたら、私はまるで別種の人間となつてしまつて、生きるよろこびは異質のものになつてしまうのだろうか。そういう人間観とかかわつて、教育観を問わねばならない。これまでの日本の教育学(者)や教育論が、障害児(者)の教育を全く別種のものに見なし、あるいは除外してしまつて、教育を論じてきたところに大きな問題がありはしないだろうか。自分はもうあと何年しか生きられない、ということを知っている筋ジストロフィーの子どもが、真剣に生き生きと学んでいるベッド・スクールでの教育と準備教育、といつて過熱している幼児の教育とは、教育の意味がどちらがうのだろう、共通する本質を見失つたままでいいのだろうか。まさに「人間にとつて教育とは何か」という問いに答えてもらわねばならない。

極限状態に生きる子どもたちも同じ人間であり、それぞれに力いっぱい生きることを求め、自らの成長を志向する欲求

をもっている存在である事に、読者のみなさんも目を向けてほしい。そしてその目で、改めて幼児教育の現実をみつめ疑問を見いだして、あるべき姿を考えてほしいと願うものである。

私は、私自身の日々の生活体験をみつめる時、遊ぶ(くつろぐ)よろこびと学ぶよろこびと働くよろこびという異質のような体験がおりなして、時に混然と一体になつて、充実感、達成感をもたらされていることに気づく。苦悩する日々も多く、自分の非力に自己嫌悪をもよおすこともしばしばではあるが、自分の内面からの願ひにつきうごかされて、全力をつくす緊張したひとときをもつた後、どつと疲れが出てきても、何か快い爽やかな感覚が残つて、こうして生きているんだなあ、という実感を味わう。そして私は、この感覚がたまらなく好きなのである。これを求めて生きているのではないかしら、とこのごろ思っている。一生努力しても自分にどれだけのことができるか、なし得る仕事の量、到達点など、私には皆目見当がつかない。何も大したことをせずに死を迎えるのだろうか。それでいいと思う。非力ではあつても、私は私なりに生き生きと生きていきたいと願っているし、私の子どもた

ちにもそういう願いをよせて育てている。

九、私たちの祖先が創り出してきた独自の「子育て」の知恵——文化遺産の価値を再発見しよう。

もう一つ、保育学年報所載の私の論文に補足しておきたい。その論文で、私は、これからの保育内容に対する提言として、五項目をあげておいた。すなわち

イ、「早熟化」から子どもを守る保育を、
ロ、原初的生活体験を充実させる保育を、
ハ、すぐれて価値ある文化財との出会いに心をくだく保育を、

ニ、個人的主観的世界を大切にはぐくむ保育を、

ホ、「人間みな仲間」という類意識を基底にした保育を、

このうちの「ハ、すぐれて価値ある文化財との出会いに心をくだく保育を」について、本論文の主張に関連して、若干述べておきたい。人類の歴史的所産である、すぐれて価値ある文化財は、いずれも私たちの先人の生きてきた暮しの結晶であり、先人の心や生活の知恵や知識を伝えるものである。

生物的存在であると同時に、歴史的社会的存在である人間の場合には、このような先人の生活のいぶき、生きてきた姿を通して、子どもたちに、生活の知恵や知識・人間の生き方を

伝え、そこから学んで更に発展させていく歴史の担い手として成長していったほしいという願いが、教育の基底にある。

すぐれた歴史的所産は、洋の東西を問わず存在する。閉鎖的な国粹主義を、私はきらう。しかしながら、子どもたちがその中で生きて育っていくこの国の文化は、この国独自の自らの歴史的風土に生きてきた人々によってつちかわれたものである。世界のどの国の文化も、すべて同様の意味で、独自の風土と国民性に根ざしてつちかわれてきた、実にすぐれて個性的なものである。そういう土壌に育ってこなかった者が一朝一夕に学んでわかるようなものでないどころか、真摯な外国文字研究者が、究めれば究めるほど、単なるコトバのちがいでない理解のむずかしさを感じるといわれていることにも通じるような、個性のちがいがあろう。人間がひとりひとり個性的存在であるように、民族・文化もまた、個性的であるがゆえに、私たちには魅力的なのである。文化人類学や民俗学等の学問が生まれてきたゆえんであろう。人間理解の場合同じように、そのような文化の個性のちがいをふまえてこそ、共通の普遍的なものを見いだし、真の国際理解も成り立つのだ、と私はかねてより考えている。自我の確立への努力を抜きにした集団主義の促進は、附和雷同であって、対等

の切磋琢磨しあう協調性をはぐくまないように、自国の自然的歴史的風土に根ざした文化遺産をうけつぎ、消化して発展させていく努力をぬきにしては、国際社会で、他国と対等の相互理解を深めていくことはむずかしい。自国の独自性、個性ある文化を認識せず、外国崇拜、西欧追隨に傾斜してきた明治以来の歩みを、今こそ反省していくべきであることをつけ加えたかった。なぜならば、今や私たちの社会がかかえている数々の難問を解決していくのに、お手本にしたらいよいよ南国や社会の例はどこにも見いだせないところに、私たちは立っているのである。それほどまでに、日本のあまりにも急激な近代化のもたらしたひずみは大きく、世界に類を見ぬほど深刻であり、私たちが自分の足元を見つめ直し、自国の歴史をほりおこして、先人の生活の知恵に学んで、状況を打開していく道を自分たちで探し出していく以外、方法はないのではないかと考えるからである。

保育学年報の、前出した上野辰美氏の論文という「(3)社会保育の再編成(国際理解の教育)……」(同書、三一ページ～三二ページ)を読んで、そのあまりにも軽薄な観念論に啞然として、私はどうしてもこのことを附言したかった。激動期の今日、皮相的に時流にのりおくれまいとしたり、外国に

ばかり顔を向けてしまうのではなく、自国の歴史をふり返り評価すべきを評価し、反省すべきを反省して、未来への展望を探りつつ歩んでこそ、将来堂々と国際社会で活躍できる個性的な人間をはぐくむ幼児教育のビジョンが生まれるのだと確信する。

より具体的に、一つの指摘をしておこう。

ソビエト通の学者たちは、しばしばソビエトの感覚教育を高く評価し、日本の幼児教育に導入しようとする。保育学年報所載の、平岡節氏論文「ソビエトの感覚教育を手がかりとして」(同書、一〇九ページ～一一八ページ)も、その線にそって、これからの保育内容を論じ、ヨーロッパの感覚教育の歴史にもふれている。けれども、いや、それなのに、少しも、日本の「子育て」の歴史・伝統の中から、私たちの祖先がつくり出してきた実的なたのしい感覚教育の事実を探し出す努力はなされていない。なぜなのだろうか？ それほど私たちの社会の「子育て」(教育)は、いい加減なとるに足りない、レベルの低いものだったのだろうか。今日までの私たち日本人は、欧米人に比べて、それほどまでに、きわめて感覚能力が劣り、それを土台にしていると平岡氏のいわれる感情・思考まで、日常のあらゆる活動が、その水準が劣っていた

のだろうか？ いやむしろ、少なくともこれまでは、日本人の手先の器用さ、感覚の鋭敏さや感情のこまやかさ、計算の早さ、学者の頭脳流出にみられるようなアタマのよさ等が、欧米人の注意、関心をひく事実であった。

私も、この国の各地を訪れて、その独自の自然的風土の中でうみ出された、手づくりの民具、民芸品や民家の風情に接する時、何と見事に自然をとり入れていることか、自然と対決するために自然をとり入れ利用していくその巧みな知恵とわざには、驚き、感動することがしばしばである。今やこういう先人の生活と心を伝える個性的な風情が急速に失われつつあり、画一的な近代化に変貌していくことに悲しみと恐れを感じ、日本の未来を案じてしまう私は、他方では、このようなユニークな文化を創造し得る人々をはぐくんできた日本の伝統的な育児の精神とわざに関心を持つものである。それは、おだやかでこまやかな変化に富んだ四季の自然とのふれ合いに関係があるろうが、また、幼時より、指先を巧みに使いこなしたり、感覚運動的協応動作の習熟に通じるような遊びを、家庭や地域社会でふんだんに行なって、まさに「遊び楽しみながら学ぶ」(平岡論文、一一一ページ)ことを実践してきたことと無縁ではないと思っている。私自身の幼時をふり返り、

あるいは、わが子とアヤトリやオリガミ、お手玉、こま回し、竹とんぼ等々を楽しみながら、いつも私は、私たちの祖先のたくまざる生活の知恵、子育ての伝統に心ひかれるのであった。こういうすぐれた文化遺産である、日本伝承の子どものあそびを、もっと積極的に現代の幼児の世界にもちこんでいく、教育的配慮が必要ではないかと思いつづけていた私は、去る日、新聞紙上に、次のような意見を見いだした。私の考えが、ひとりよがりでないことを知ってほしい。

子供の遊び

村上 兵衛 (評論家)

ごく常識的な意味で、日本人のアタマのよさは、疑いなし現象のようである。そして、その原因の解明は、世界的に興味を持たれている事柄だが、現在のところ二つの理由があげられている。ひとつは箸を使う習慣、すなわち幼児のときから指先を微妙に使う訓練をしていることが脳の発達に好影響のあること、第二には、漢字の使用がパターン認識の訓練になっていること——である。

私は、その説を全面的に認めたくらなくて、さらに第三の大胆な仮説を提唱してみたい。それは日本の子どもたちの伝統的な遊びである。おハジキ、お手玉、折紙、綾とり、メ

ンコ、凧(たこ)上げ、石蹴り、ジャンケンなど、これらの遊びには、指先のデリケートな動き、相手や状況に対応するするどい反射神経、数の敏速な呼称などの反射訓練がおのずから織りこまれている。

こま回しや輪投げのように、世界共通の子どもの遊びもあるが、日本の子供の伝統的な遊びには、アタマをよくする要素が非常に濃くふくまれているのではあるまいか？

もしこの仮説が正しいとするなら、私は、いわゆる後進国における教育問題にも、多くの示唆を投げかけるように思う。学校教育の普及も大事だが、それ以前に子供たちにもこのような「遊び」を教えることが大切だ。同時に、私は日本人のアタマのよさも、やがて昔の語り草になるのではないか、とも思う。というのは、箸すら満足に扱うことのできない青年のふえたこと、またここに述べたような伝統的な遊びが次第にすたれ、子供たちの遊びが、教育的につくられた(と称する)遊びに取って代わられつつあるように見えるから。

(47年7月14日付、毎日新聞夕刊「茶の間」)

教育界にあって、「教育」に熱中して、視野が狭くなり硬直

しがちな教育学者や教師は、少し頭を柔かくして、別の角度から考えてみることに、発想の転換をはかることが必要ではないだろうか。人間は、部品を組織的に組み立ててできあがっている機械とは大いに違うし、機械のように外側から完全に掌握できるシステムによって動き得る存在ではない。教える「か」と思ってもいないところで多くを学び、何となく心ひかれて夢中になってやることが後で大きな意味をもってきたりする。そのように、明確な因果関係は不可知な部分の方が多い、人間性の奥深さやおもしろさに対して、私たちの祖先はずい分よく理解していたのではないだろうか。私たちは、「古きを温めて新しきを知る」といった精神をとり戻し、自国のすぐれた文化遺産である子育ての知恵をほりおこして、次代に伝えていこうではないか。

十、中教審路線との対決」といったスローガンによる観念的批判への疑問——教育の事実をみつめて、具体的に相互批判していこう——

新聞報道によれば、今年の七月末に大阪で開かれた第十九回日本私立幼稚園教育研究全国大会では、「幼稚園教育の現代の課題をどう解決すればよいか」という中心テーマの下に討

議され、政府の幼児教育政策をきびしく批判し、中教審路線との対決の姿勢を前面に出した。(47年7月28日付、毎日新聞夕刊)

他方、少し遅れて八月上旬に、やはり大阪で開かれた第九回全国国公立幼稚園教育研究協議会でも、シンポジウム「幼児教育の展望」において、中教審答申の「先導的試行―幼児学校構想」について討論され、全体としては先導的試行を支持する意見が強かったという。(47年8月5日付、毎日新聞朝刊)

私は、この両報道をうけとめて、解せぬ思いを深め、またしても観念的な議論に終始する日本の現状をみせつけられて、絶望的だと感じた。私は、これまでに、かなり多くの幼稚園を足繁く訪れて、親しく保育の実態をみつめて考えてきたが、京都、大阪、名古屋市内の国公立幼稚園では、生き生きと遊ぶ子どもたちの姿とつねに子どもの主体的活動を尊重して共に楽しみ活動しながら指導していく保育者の姿に、触れることができた。それに対して、私立幼稚園の保育内容は千差万別であるが、幼稚園が適正規模を見失ってマンモス化していくにつれて、子どもの主体的活動が制限され、教師の側で一方的に予定したカリキュラムを子どもにあてはめて、画一的

に組織的に何かを教えようという、教育意識過剰で無感動な知育偏重の傾向が滲透していく事実を発見していた。そこでは、子どもたちが生き生きと熱中してあそぶ姿やそれに共感していく保育者の姿はみられず、没個性化を強いられて、適当に飼いならされていく子どもたちの姿があり、その将来を思っただけの暗い気持になるのだった。こういう保育内容の事実と、「中教審路線との対決」とは、どう関係するのだろうか。私には、先の私幼大会の中教審批判、知育偏重の批判が、具体的にどのような保育内容の創造を目ざしているものなのか、皆目わからないのである。本論文のはじめの方で紹介した、ある私幼の主任の先生のつぶやきは、現在の私幼の関係者は、自分たちの日々の保育活動について、その意味について、足をみつけて考え、異なる国の異質の保育内容、保育活動とつき合わせて、そのちがいの意味するところを考え、互いに具体的な事実について討論し批判し合っていく必要があるのではないか。

幼児教育界に限らず、他の教育現場でも、いや広く今日の日本の各界において、体制派か反体制派か、保守か革新か、Aか非Aか、○か×か、という二者択一的、二元論的発想でしか対決していかない、観念的な不毛の論争が氾濫してしま

って、事実をみつめて緻密に考え、事実への疑問を提起して論争していくことが少なくなっていることが、私には、私たちの国のためにも、残念でならない。つねにスローガンを掲げてくる学生たちに対して、私は、単に「中教審紛砕」で「文部行政批判」を叫ぶだけでは事態は悪化するばかりだ、と事実をあげて反論していく。それほど現在の教育の荒廃は深刻であり、根が深いと、私は思っている。たとえば、つねに、「中教審路線や文部省批判」の教育論を展開されている、和光大学学長の梅根悟氏が参画されている「幼稚園・保育園百科」が、既に紹介したように、教師や子どもの主体的活動を制限して、一方的に画一的に教えていこうとする、人間疎外の典型のような知育偏重のカリキュラムを、「新しい教育内容の具体化」として説いているのである。私たちは、こういう事実をしっかりとみつめて発言しようではないか。この情報過剰時代、ひとりの人のあるいは人々のことばによる主張と、そのことばの背後にあるその人の人々の、本当の考えや日常的な営みとのズレは大きくなる一方である。「どっち側の人か」というようなとらえ方でごまかされたり、自らをごまかしてしまうことをやめて、事実についてしっかりと考えていくようにしないと、事実はますますあいまいになり、建前と実状の

落差、内部矛盾は深まるばかりで、絶望的である。

今、私たち日本人に必要なのは、どんなスローガンを採択するかということではなく、観念論ではなくて、現実をしっかりとみつめ、自分の日々の活動を反省して疑問を見いだし、具体的に相互批判しながら、ビジョンを探って、事実を改善していく努力をしていくことである。幼児教育についても、このことをはっきりさせたかったので、私はこれを書いたのである。

おわりに

私は、一方的に啓蒙的にものを言うことを好まないのです。人と語り合い、相手の考えに刺激されて自分の考えがひき出され、ちがう考えをつき合わせて、かみ合う議論になって話はずんでいくとき、考え方の違いがどこから出てきたのかという根本について、新しい発見をして、自分の考えがねり直され、深められていくのを覚えるのです。こういう時が、私の楽しい遊びの時間でもあり、学びの時間でもあり、仕事の時間でもあるのです。教室で、研究室で、家庭で、いろいろな立場のちがう人たちとこんな時間をふんだんに持てる私は、実に幸せだと思っています。ギリシャの昔から、対話こそ知

識の源泉であり、知性を磨くところであったことを思うと、一方的に、互いに無関係におびただしい情報が流されるばかりで、かみ合う議論のほとんどない、いわゆる対話の欠如している現代は、知性の低下を招いていくのではないかしら、と心配になってきます。見解の全く矛盾するような雑多な情報が氾濫しすぎて、ひとりひとりはどう考えていいのか、考える手がかりを見失って、だんだん考えなくなっていく現代のこの状況を、打開していく一つの試みとして、私は、この誌上で具体的にかみ合う議論（対話）を展開してみようと思つたのです。やさしいふつうのことばを使うようにも心がけてみました。はじめにお願いしたように、ゆっくり考えながら、議論に参加するようなつもりで読んでほしいのです。疑問をもつところはないか、納得のいく話であるか、自分のやつていることに照してみてもどう思うか……と自問自答しながら読みすすめてください。そういう読み方は、すぐれた対話であるからです。そしてできれば具体的な批判や反論を、どんな小さいことでもよろしいからおよせください。「幼児の教育」誌が、そういうかみ合う議論のできる誌上対話の場として提供されるようになれば、教育界に内臓する根本的な矛盾にメスを入れて、みんなが考えていくことができるようになる

るかもしれませんが。議論になれない私たち日本人にはむずかしいことですが、今日の絶望的な状況を正視して、勇気を出して現状打開の行動をおこそうではありませんか。

（大阪教育大学）

